

2. グループ討議

グループ1

ファシリテーター 山本 康史 氏（特定非営利活動法人みえ防災市民会議議長）

津賀

お時間になりましたので、グループ討議を始めます。進行は、みえの山本さんをお願いしております。

まず、進行について説明します。午前中、阿部さんと河内さんから話題提供をしていただきましたが、その後の意見交換も含めて、言い足りない部分もあろうかと思っておりますので、午後は、被災地での支援の実例や平時からの取り組みについてももう少しいろいろな意見を出していただき、皆さんで共有する時間にしたいと思います。

参考情報として、この後、1月27日開催の「みんなのBOUSAI!! in 神戸～広がる共助の輪・ミーティング～」でも共助や多様な主体の連携に触れつつのお話がありましたので、ご紹介させていただきます。その後、意見交換の時間にしたいのですが、できる限り時間を有効に使うために、お配りしている紙にご発言のキーワードを書いて、それを見せながらお話しいただくという形を取りたいと思います。みなさんの書かれた神をボードに張りつつまとめていきたいと思っております。

山本

紙に、言いたいことと、名前を書いてもらいます。例えば僕の場合だと、『多様な主体が要援護者にかかわるためには、要援護者の窓口になるケアマネのような人材が災害復旧でも要と思っています』。このぐらいで意見は止めてください。

鍵屋

ケアマネに防災教育をしていけばいいのではないかという話ですね。

山本

そういう話にもなってくるし、災害復旧支援員さんがそういう役割を担えるのかといったところになってくるかと思うのですが、ネットワークを作っても支援者とつながらなければ意味がない、その窓口は誰なのかというところですね。

津賀

今のはコンパクトにまとめていただいたのですが、お一人が3分を超えると、しゃべる時間が制約されてくるので、そこを工夫するためと、議論の振り返りもできるようにこういう形を取らせていただきますので、

ご協力をよろしくお願いします。それでは、ここからの進行を山本さんをお願いします。

山本

では、よろしくお願いします。途中、煮詰まったら適宜休憩を取ろうと思っていますが、ぜひ進め方の協力をさせていただきたいのと、コンパクトにポイントを絞って議論をいただきたいと思っています。

まずは言いたいことがあると思いますので、これに2～3枚でも書く時間を取ろうと思っています。これを書くための論点の紹介という形で、「みんなのBOUSAI!! in 神戸」の概要を鍵屋さんからご紹介いただきます。

鍵屋

資料3です。最初に室崎先生の基調講演がありました。12ページあたりから、東日本大震災の話です。300万人いたけれども足りない、いろいろな人たちが来たということで、8点ぐらい室崎先生の問題意識が書いてあります。そして、これからのボランティアの課題の克服ということで、謙虚にいきましょう、一緒にやりましょうということを書いています。

次の10ページからが、これを受けて、パネルディスカッションでのパネリストからの話題提供です。「ふんばろう東日本支援プロジェクト」の早稲田大学の西條さんが、リミッターを外せ、やれることを何でもできる限りやろうという感じで呼び掛けています。問題があって解決できていないのは方法論が悪い、問題があったら新しい方法論で解決すればいいだけだと提唱して、ネットを使って、非常に楽しく、みんなが参加しやすい形で、「ふんばろう東日本」を1人で立ち上げたのです。すごいです。

青木さんは神戸大学の学生で、足湯プロジェクトをやっていた方です。楽しさ、ワクワク感とか、ほっとする存在という、若者らしい心の寄り添い方をしていきましょうと。

長沢さんは、経団連の「1%クラブ」を支えてこられた方で、企業文化を「予習」で変える。事前学習をきちんとやることによって、企業の人たちが支援になる形がある。それが『つながる』ための7か条』だという形で整理しています。

松田さんは、国土強靱化ではなくて国土柔軟化計画が必要だと。「やわらかなつながり」は、多様な広がりではキーワードになっています。

南さんは、旧居留地、神戸で一番の繁華街で親の代から支えてきたという人で、自分の会社の利益などと言っていたら恥ずかしい、街のために何をやるのだということでみんなで力を合わせる、そういうことをやっていたということでした。

11ページの7ですが、レジリエンスの世界というか、したたかにやらないと駄目だということで、したたかな強さ、やわらかい強さということを強調されていました。人間力みたいなものでしょうか。

「NPOのチカラ」というところでは、学生の就職先としてNPOという選択肢が当たり前になるというお話。それから、面白いと思ったのは「コミュニティ」の下から2番目の「雨ニモマケズ 風ニモマケズ・・・あまり役に立っていない人がいることで場が和んだり問題が解決する場合もある」です。これは、なかなか企業人からは出てきません。ほとんど役に立っていないけれども、その人がいるおかげで、というこの感覚はすごいと思いました。それがやわらかいつながりの強さにつながるという話です。

最後の「受援と支援」は、僕が言ったのだと思うのですが、障害の世界では、自分1人でやれることを自立と言わないのです。ほかからの支援を受けながら自分のやりたいことができる状態を言います。自分のやりたいことができる状態を自分だけで確保できているけれども、そういうことは絶対なくて、いろいろな人の支援がありながら自分のやりたいことができる。そういう状態の自立を目指すということを考えていたということで紹介しました。

山本

そういう神戸でのミーティングの成果を受けて、僕たちもさらに、多様な主体による連携について、何か方向性を作ろうということではなく、論点を抽出していくという感じになるのかなと思っています。その上で、これからそれぞれ、皆さんが日ごろ思っている問題意識、もしくは事例紹介をいただければいいと思います。

まずは書いていただいて、順番に発表していただこうと思います。よろしくお願いします。

ほかの人の話を聞いているうちに、書きたいことが変わってくることもあると思うので、全員1枚書けたぐらいで、まずは1人ずつご紹介いただこうと思います。では、書きつつ聞いてください。鍵屋さんから、お願いします。

鍵屋

価値観や経験値の違う人が、平たく連携するにはどうすればいいか。多様な主体は、それぞれいろいろな価値観を持っていて、経験値も全然違います。若い人もいれば、お年寄りもいる。福祉もいれば、利潤追求もある。そういう人たちが平たく連携をするのはとても大事だけれども、当初は、「分かりました。じゃあ一緒にやりましょう」と言えない何か、わだかまりがありますよね。それをどうやって解決していくか。飲み会だと言えばそれまでですが、その前に何かあるのかなと思います。

稲垣

僕は、コーディネーター、仕掛ける人が大事なのかなと思います。連携はみんな分かっているのですが、誰かが仕掛けない限りは動かないので、これはなくてはならないと思っています。

丸谷

内閣府の冊子の「広域連携の体制構築に向けて」の中に「中間支援団体」という言葉が出ていて、それが

リエゾンとか情報共有といったキーの役割をすると。今回も結果的に幾つかそういう役割を果たしたところがあるらしいのですが、今後、中間支援団体とは何なのだろうかという話と、誰がそれを担うのかという話について、具体的なコンセンサスがあれば前に進むかもしれませんが、皆さん、やりたいか、やりたくないか、よく分からない。現場は持たないという感じの説明もあります。

情報ボランティアのようなところがそういう役割を果たしているのかもしれませんが、多分、情報だけではない話で、こういうものがないと大災害には立ち向かっていけないということについて、今後こういう人たちがどうなるかを皆さんから教えてもらいたいと思っています。

鍵屋

中間支援団体は、現場を持つてはいけないのですかね。

丸谷

この中には、中間支援団体は現場を持つと大変だと書いてあります。

鍵屋

後方支援と中間支援はどう違うのですかね。

丸谷

少し違いそうな気がするのですね。

葛巻

NPOを真ん中に表現しているのですが、企業、行政、市民などいろいろなプレーヤーがいる中で、それぞれがNPOについての理解が弱いというか、「結局好きなことをやっている人たちでしょう」みたいなところがあります。これは行政でも企業でも言えて、それをNPOがどう理解しているかということもあるので、相互理解が足りないと思います。

合田

プレーヤーをまとめる中間支援団体とかコーディネーターも必要だと思いますが、まずそのプレーヤーである一人一人のボランティア、一団体、一組織がちゃんと自分の役割、責任を果たさないと、仕組みだけがあっても仕方がない。まずは自分のやることをちゃんとやる。

世間では、“ボランティアがやってくれてラッキー”だと思っている節がすごくある。ボランティアだって、大切なポジションとしてちゃんと数字の責任を負ってもいいと思っています。あったらラッキーという無責任な存在ではなく、責任ある存在として扱ってくださいと。

水島

企業というのがあまり出てこないのが、生協という一つの企業としてとらえていただけたらと思うのですが、地域の減災への新たな連携ということで、企業がどう地域に絡むかという事例を二つほど発表しようかと思っています。

東京の杉並区で、地域の社協の呼び掛けで、自治会、学校の校長先生、子供会、行政等が一堂に集まって、この地域で大災害が起きたときの住民としての対処の仕方を平時からどう作っていくかという話をスタートされて、この間準備会が終わって訓練までしました。これに私も呼ばれたのですが、今まで遭遇したことのない絡み合いだったと思っています。

もう1点は、綾瀬だったと思いますが、小学校区の自治会、学校、区職員、社協に企業が「この地域を私たちも一緒に守りたい」と呼び掛けて、火災危険地域になったので、具体的に有事になったときにどうするかという話し合いが既に始まっています。

この二つは、今までの視点と全く違って、内側からわき起こった、地域の人などいろいろな仲間を呼び寄せて一つの防災を作っていくという動きになったことに衝撃を受けました。これからそういう方向で、内側から作られたものが動き出していくというところが大きく動いていく可能性もあるという気がします。

岡野谷

受援力の視点をもう少し広げようというご提案をしたいです。「受援力」自体は内閣府の検討会でできた言葉でもあり、自分たちの地域が被災したときにボランティアを受け入れていける力を付けようというコンセプトですが、もう一つ、自分たちの、つまり被災した土地ではなく、県外にいるボランティアに自分たちの家族を預けていける力も必要なのではないのでしょうか。それもひとつの「受援力」なのではないのでしょうか。要は、元気な大人は県内で復興に向けて立ち上がるが、乳幼児や高齢者など、被災地の厳しい状況下では耐えることが難しい被災者を県外にいる受け入れ先（ボランティア）に一時的にお任せしていく力です。一時的に安全な地域に出して、でも「ライフラインが戻ってきたら帰っておいで」と言えること、そこがとても重要です。

「絆」という言葉を、激甚な被災地内に家族が全員一緒にいることが大切なのだという雰囲気にとらず、地域の皆さんも「一回出ていったら地域に帰ってこられないぞ」というのでもない。いったん外に出て、落ち着いたら帰っておいでと言える力も「受援力」として認識し、ぜひ、受援力のパンフレットを改正して広めていただければと思います。

南部

「継続は力なり」と簡単に言われるけれども、その一番の原動力は何なのだろう。ここからみんなでお金をもらうことだろうか。それも一つだけれども、私たちは、18年、頑張って頑張ってここまで来た、次の一歩何をしたらいいのだろうかというのが、一番の課題です。

高梨

今日のテーマからまず頭に浮かんだのは、多様な主体の連携は難しいということです。どこを主体にするかが一番のポイントで、先ほど大学生だという方もいましたし、町内会を主体としてやっているだけではお母さんのネットワークなどがつながらないので、小学校区単位の連携を基本に展開するパターンが結構見られてきていますが、まずどこが力になるのかという芽を育てていかなければいけないということが一つです。

もう一つは、一方で、今まで一生懸命にやってきている人たちの中での対立が結構あり、例えば、消防団と町内会の仲が悪いとか、ボランティア団体も地域の方の中になかなか入っていけないとか、新しい芽が出てきているのだけれども、それをどうやって市民化、ネットワーク化していくか、地域によって主体となる団体や個人は違うと思いますので、それぞれで特性を生かす必要があるのではないかと。

さらに公助の部分も問題です。今まで行政主体と言っていたのが住民主体になったときに、縦割りとか、行政としての限界が出ていて、行政同士、実働部隊同士でもうまく連携できないといったことがあるので、全体をまとめるのは非常に難しい。それからいくと、ここ（防災ボランティア活動検討会）のネットワークをまず大切にしてくださいということです。

小村

私は、「静岡図上訓練の横展開を真剣に考えませんか」というテーマで書きました。これは静岡県ボランティア協会を中心とするグループが8年前から始めたプロジェクトで、毎年2月終わりとか3月頭に全国の防災系のボランティアが400名規模で集まってやっています。ワーキンググループという20～30代の方々が訓練の企画に携わっています。

多様な主体やつながりの具体化、リエゾン、受援力、出会い、気付きという言葉を書きましたが、今年面白かったのは、防災系以外の組織の人も随分入ってきていることです。地縁系のメンバーとどうやってお見合いの場をセットしようかということが、プログラムの中で組み込まれていました。そういう形で地縁系の話とテーマ型の話はどうやってくっつけるかということ、既にプログラムとしてはやれていると思っています。

それを、南海トラフ沿いの巨大地震も意識しつつ西の方に広げていく、ぼちぼち本気でやるべき時期が来ているのではないかと考えています。もし時間があったら静岡の図上訓練についてコメントをいただければと思います。

山梨

ボランティアを中心としたということですか。

小村

内閣府、静岡県も来ていますし、県社協も頑張っていますが、基本はボランティアの集まりが中心です。

山崎（東京ボランティア・市民活動センター長）

先ほどの西條剛央さんに刺激されたわけではないのですが、新しい方法を生み出していないと、ボランティアは死んでしまうと思うのです。今までつながっている人はいいいのですが、つながりにくい、あるいは敵対している人たちとどうつながるのか。そのしなやかさとやわらかさとしたたかさを作らないと、現地で敵対するばかりになってしまうので、それが要だろうと思いました。

今回亡くなった方が1万8000人いて、その中には消防団員なども含まれるのですが、「私のことはいいから、あなたは逃げて」と言って亡くなった方、置いていけなくて一緒に亡くなった方もいらっしゃいます。そういう支援を拒否した方、それから町の中で排除された人、生き残って目の見えない方のお話も随分聞いたのですが、そういうことを考えると、したたかにやわらかくつながり合うということは、今までつながっていない人とつながらないと発展ができない。

もう一つの重要なことは、弱さこそは実は強さになるので、脆弱性から発想しないと本当の支援はできないのではないかと。その作り方を本気になって考えないと、自己満足の活動のネットならいくらでも作れるのですが、そこをどう乗り越えるのかが本当の意味での支援の中核ではないかと。そこをどう作っていくのかが私たちの次のステージの課題だと思います。

阿部

今の山崎先生のお話やコーディネーターとか中間支援というお話と絡むと思うのですが、先ほど偉そうにしゃべりましたが、助成をすることが目的ではなく、皆さんと同じステージの中で同じように支援していることだけは、ぜひご理解いただければと思います。

現地でお会いしている方々のお話を聞いたり応募書を読んでいて一つだけ気になるのは、自己完結していく団体が毎回あるのです。そうすると、本当は専門機関なども含めてつなげていただきたい課題が潜っていて、被災された皆さん個人個人のニーズに結び付いていかないと、2年間たってもずっと思っています。ですから、連携というよりは、恐らくそれは地元の認知もあるだろうし、まさにコーディネーションの話ではないかということが一番心配しています。

山口

日本には日本の優れているところ、独自性があるし、今回の震災でも、東北にはそれぞれ文化に根付いた価値観や人々の考え方があって、それがまず第一に尊重されなくてはいけないと思うのですが、一方で、避難所でプライバシーが守られていないとか、社会的弱者に対しての配慮が不足しているとか、男ばかりに決定権があって女性がちゃんと自分たちの意見を言えない。これは、国際基準に照らして普遍的に必要な価値観を学んでいかなければいけないと思います。

ただし、単に欧米崇拜で国際基準を日本にそのまま適用するのではなくて、どう応用して日本のコンテキストの中で価値として作っていけるかが重要であって、そういうことを学びつつ、自分たちがこれからやっ

ていくことにうまく入れ込んでいく必要があるのではないかと思います。

弘中

3枚書きました。一つは、人と人とのつながりと組織同士のつながりです。連携というと、男性は組織間の連携をすぐ考えてしまう。人と人とのつながりも大切であって、人と人につながるのには女性的が上手なところではないかと個人的には思っています。東日本大震災が起きたとき、私は仙台にいる北川さんの顔がすぐ浮かんだのですが、やはり知っている人とのつながりが結構大事だと。どちらも大事だけれども、人と人とのつながりなくして組織同士のつながりはない。そういう意味では人と人とのつながりはすごく大事だというのが第1点です。

2つめは、組織間のしっかりしたつながりも大事だけれども、その一方でもっとやわらかいつながりというか、弱い関係性、例えば知り合いをたくさん持っていることの方がもっと大事だということも今回の震災であらためて思いました。

3つめは、そのつながりについて、見える化することがすごく大事だということです。防災とは全然関係ない、大分県の別府で始まった「オンパク」という観光の手法は、参加者とか実際に運営する人とかサポーターとかメディアとか、上手にわかりやすく見える化されているのですが、このように見える化することでも大事なのではないかと思います。

河内

先ほど阿部さんが言われた自己完結の話に近いのかもしれませんが、支援者が支援するだけではなくて地域や他団体から支援されるとか、地域の方も、支援者に全部やってもらうのではなく、支援者を支援しなければいけないぐらいの話になってくると、地域の実践が若干出てくるのではないかと思います。

頼政

連携はいいことなのですが、取り組む課題をはっきりさせて目的を持った連携でないと、連携が目的化してしまうとうまくいかないのではないかと思います。テーマ型という話も出ましたが、テーマの人と地縁の人にどういう共通の課題があるのかということから連携が始まっていくと具体的なアクションにつながると思います。

宇田川

支援力の中身を考えたらいいのではないかと、自分たちではできないことを見つける支援力を付けようと思っています。特に専門性の高い団体はできることがはっきりあるのだろうけれども、逆に言えばできないこともはっきりあるということも示しているわけです。現場のニーズは簡単には見えませんが、ニーズにぴんと来る支援力があれば、自分たちは解決できなくてもつなげることができる。それを解決する力が本来のネットワークという言葉の意味なのだろうと。そこにつなげられる力を持つことが支援力の中でとても重要だと

感じています。

津賀

全体で出てきたことをどうまとめているのか、説明します。最初に鍵屋さんがおっしゃった、どれだけ違いの認め方ができるか、連携をどうするかという、「連携の心は」みたいなものに近いキーワードがこのあたりだろうということでぺたぺた張っています。ただ、全体で一本筋が通っているか、何か共通のものがあるかという、そこまではまとめられていません。

あとは、地域でやっていく上での担い手に関する話、事例の話、もう少し引いて見たときのコーディネーターとか中間支援という担い手、役割、機能の話ということで、張る位置を変えてみました。

小村

左側でまとめられていることについては口を挟む必要もないと思うのですが、それを具体化するプログラムは何なのかということの問題提起しておきたいのです。考え方はそのとおりだと思いますが、ここのメンバーであれば、それを担える人たちや仕組みをどうやって作っていくのかという具体的な方法論に入っていないはずですよ。理念の整理も大切だけれど、もう少し方法論を持つべきではないかという感じはありました。その具体的な方法論として、静岡の図上訓練のようなものを提起しているということです。

鍵屋

私は、頼政さんの連携の目的をはっきりさせるところに強く共感します。そもそもなぜ連携しなければならないのかというと、それぞれが勝手に入って支援するだけではうまくいかないからです。例えばお金の面でも人の面でも物資の面でもツールの面でも、自分にないものを幾つか組み合わせてセットで持っていないと十分な支援ができないから連携が必要だという部分で、では、支援とは具体的に何なのか。

認知症の人が安らげるような支援か、子供たちの学習環境を整える支援か。多様なニーズをしっかりと見て、こういう目的のためにはこういう連携が必要だと。一般的な論だけでいっていると進まない気がするので、多様性をしっかりと見る中で、どこがよくて、どこが悪かったのか、どこにボトルネックがあったから行かなかったのか。学校の先生がしっかりボランティア活動に入らないから、教育の支援がうまくいかなかったのかもしれない。消防団員がたくさん亡くなって警らする人が少なくなったから、治安が乱れたのかもしれない。そういうことを掘っていった上で、ではどういう連携をしなければいけないのかという目的がまずあって、その次に、どう上手に連携するかという問題になるのだと思いました。

上手に連携する前に、まずは何がうまく行って、何がうまくいかなかったのか。うまくいったところにヒントがあるだろうし、うまくいかなかったところにも大きなヒントがあって、そのボトルネックを探し出してつぶしていかなければいけないと思いました。

阿部

3県の連携復興センターと、被災地支援している助成団体、企業系の皆さんも含めて、去年の8月ぐらいから、継続を目的とした情報交換と意見交換会を断続的にやり始めています。今は連復さんと一緒にやっているのですが、実際の活動団体の皆さんといろいろなステージでやっていくことによって、目的や中身はポイントが絞られてくるのではないかとのご報告です。

山本

一言だけ私も感じたことをしゃべらせてください。特に「連携の心」の、目的があって連携が始まるという部分では、災害が起こった後の連携は目的も絞りやすいし、見えやすいし、そこで誰をつなぐかでコーディネーターがどう動くのかというディスカッションが、まず一つあると思うのです。

それと、平常時からどうやって連携しておくのか、それを災害時にどう生かすのかという議論になったときに、平常時でも有意義に感じられるテーマで集まったこのメンバーであれば災害時のこういうテーマができるという、平常時のテーマと災害時のテーマを切れずにつなぐようなこと。つまり、平常時から思いを持ち、議題を持った上でのネットワークであれば、災害時にもより有効に動くというつながり方の事例を紹介できると、今後、進めやすくなるのではないかと感じながら聞いていました。

鍵屋

平常時に高齢者や障害者の医療的ケアをやっている人たちは、その問題意識で集まって福祉と医療のネットワークがあります。その人たちはそのままセットもので、災害時にも福祉と医療がずっとつながるわけです。医療的ケアをやっていない地域は災害時に福祉と医療の連携が欠けてしまうのです。だから、平常時のものをそのまま災害時に持ってこられるパターンと、災害時特有のものだから平常時のものを持っていきにくいパターンがあるのだらうと思いました。

山本

そういうものを幾つか抽出して事例紹介できると参考になるのではないかと思います。

岡野谷

同じような意見ですが、例えばアレルギーを持つ子どもの会とか、腎臓病で透析しなければいけない方たちは、今、平常時から「災害時の動き方」を考え始めていますよね。普通はゆるりとしたネットワークだけでも、災害が起こったときに自分たちは何をしなければいけないのだらうと考え合うグループがたくさんできてきている。それをわれわれがどううまくネットしてあげるか。そういう個々の小さな当事者グループの連携を、防災の視点で見たわれわれのネットワークが、どううまく広げてあげるかを考えていくといいと思います。

宇田川

日本に生きている宿命をすべての場面で考えていく時間設定、プログラム設定が必要だと思うのです。防災教育は、特殊な何かがあるのではなくて、自分たちが生き続けていくための基本の知識としてなければいけないと思います。

だから、さまざまな研修場面においても、この研修目的を達成するためには、防災という問題を考えなければその体制自身が崩れるのだろう。それはすぐには来ないけれども、いつかは必ず来るのだと。中心課題でなくてもいいけれども、どんな場面でもそれを入れていくということが必要ではないかと思います。僕もいろいろなテーマで講習を頼まれますが、必ず防災の問題を一言入れるようにしています。

山本

盛り上がってきそうなのでここで止めるのも心苦しいのですが、5分ぐらい休憩を入れます。(休憩)

再開します。一巡して、「連携の心」については十分出てきていると思います。価値、違いをどうやって共有化するか、目的をしっかりと持って多様な連携ができるという話があったわけですが、そういうことがあるにもかかわらず、多様な連携が進んでいない現状がある。ではどこにボトルネックがあるのか。これを解決したらもう少し進むという課題点を出し合ってみたいと思います。

そのための解決策としてこういうことが必要だという事例の提案も、既に出てはきているのですが、もう少し課題を共有できればと思います。

小村

基本的に出会いの場が少ないのだろうと思っています。具体的な例を一つだけお示しすると、昨年4月ぐらいに社会福祉協議会と企業の出会いの場をセッティングしましたが、共通のテーマ設定自体が非常に難しかったです。シンポジウムのコーディネーターを頼まれたのですが、最初は無理だと思いました。

ことほどさように、出会いの場は必要だということは言えるけれども、それを担える人材が少ないと思っています。こういうものをどうやって作っていくかという話で、最終的にノミニケーションに持っていきたいのだけれども、そのはるか前の段階で苦労しているのが実態なのだろうと思います。

岡野谷

「社会福祉協議会」、「社協」という言葉も存在も、結構知らない人が多いですね。

小村

多いですよ。

山本

お見合いの場で何をするかというところでイメージがつかないのですよね。

小村

まさにそのことなのです。

岡野谷

災害時要援護者には、高齢者だけではなくて、障害者、乳幼児とか、外国人、旅行者なども入っています。「高齢者、障害者、乳幼児等特に配慮を要する者に対する防災上必要な措置に関する事項」という言葉が災害対策基本法にちゃんと書かれているのに、なぜか地域防災計画には「高齢者等の災害要援護者」と省略されて書かれてしまいます。そうすると、その先の市町の避難所の設営マニュアル等には「高齢者」についてしか書かれないわけです。配慮されるべき赤ちゃんのミルクはたった1種類しかない。おしめも1種類。それでは子どもたちの成長に対応できません。それがどこで切れてしまっているのか。

ですから、災害ボランティアセンターマニュアルも同様で、「要援護者」「要支援者」について明記するなら、ちゃんとどんな人々を対象にするのか、具体的な中身を書かなくては駄目なのです。行政にも「高齢者等の」とまとめないで、障害者、乳幼児、妊婦と、地域防災計画にしっかり明記してほしいとお願いしているのですが、なかなか対策ができないということが課題ではないかと思います。

山本

確かに、支援すべき人たちを「など」でまとめる時点で、既に分かっていないという話ですよ。

岡野谷

そうですね・・・というか、実際の現場や惨状を思い浮かべて書かれていない。それができるならば、より具体的な文章を書かざるを得ないと思うのです。

南部

防災ではなく、そのほかの場で活動している女性を使うことだと思います。私がしている縁側サミットのメンバーが全国的に広がっているんで、その女性の力をうまく使って、ものを作りながら、しゃべりながら次へのステップを見つけていくことが、一番近道であり、早いと思っています。

支援するときに、今度は餅をつくのと言ったら、たちまち600kgのもち米が集まってくる。200臼の餅をどうやってつくか、お金がないのにそれをやり遂げていけるのは、やはり女性の力はすごいと思います。そういうものをうまく使うといいと思っています。

山口

「連携のメリットが不明確」。集まれば何かいいことがあるのかもしれないけれども、具体的に何ができるのか。自分たちが参加することによって何が得られるのか、連携するとどういことができるのかが不明確だから、参加しない人がいるのではないかと思います。

頼政

僕も一緒に、中間支援をやっている人たちは連携が結構好きな方が多いので「やりましょう」と言うのですが、現場に入っている小さな団体の、例えば石巻に入って障害者支援をやっているという人は、仙台で連携会議をやると言われても行くのが大変だし、行ったところで何を返してもらえるのかが分からないので、なかなかつながっていかないところがあるのではないかと思います。

水島

11日に2年ぶりに南三陸へ行ったのです。そうしたら何もありません。復興、復興といっただろうという一つの課題を与えられました。

唯一、カキとワカメを出荷できるようになって、テント張りの加工場を作って、全国の生協ができたものを買おうということでも継続してやっているのですが、ワカメとカキを取る船がないということで、再び全国に呼び掛けて、船を買う義援金を募っています。それをやると、地元の人を30人雇って経済復興が始まっていく。

私は、復興をどうしたらいいのか、1人の民間として分からなかったのですが、こういうことを企業ボランティアのような感じでやっていると復興していくのではないかとということで書きました。生産・加工から販売というところが非常に弱いので、企業の得意分野を生かしてそこをつなげていくことも一つの連携かなということでした。

河内

全部が全部ではないと思うのですが、団体が勝手に壁を作っている。プライドというか、自分たちはこういうことができるからほかは必要ないという感じの壁を作っているところもあると思います。

合田

災害が発生したときは共通のシンプルな目的が作りやすいが、平時は共通のシンプルな目的が作りづらいのだらうと思います。NGOやNPOは、「メリットは分からないけれど、とりあえず行きます」というほど、会議などに人が割ける状態ではないだらうと思います。

葛巻

表現が幼稚かもしれませんが、余裕がないというか、連携する時間があるなら違う活動をした方がいい。

例えば、2の労力を使って連携すれば10の効果が得られるかもしれないけれども、1の労力で自分でやってしまう。「メリットがない」にも似ているかなと思います。

弘中

私は人の問題が大きいのだらうと思っていて、今言われたように余裕がない。今やっていることでいっぱい、人の話を聞く余裕がなかったり、話をしても全然聞いてくれない。あるいは、自分たちにどのような問題があるか、課題に気が付いていない。それを気付かせることも大事なのですが、なかなかそこまでできていなかったのではないかという気がします。

宇田川

水島さんが言ったことで感じたのですが、募金でも何でも、割と大きな呼び掛けがほとんどではないですか。最近、この地区のこの団体にと集約されてきましたが、それでも不十分だと思うのです。

今のように、この船を買いましょう、そうすると30人雇用できますという具体的な数字が見えるのはインセンティブとしてとても大きいと思います。先ほどからメリットが見えないと言っていますが、呼び掛ける側もメリットを具体的に出していない弱みがあるのではないかという気がします。

阿部

余裕がないという言葉を代えると、今の数字のお話とも一緒なのですが、災害が起きて受け身になったときの目標設定、想定、受け身になったときのリアル感を数値上どうやって出していくかというところからの話かなと思って聞きました。

岡野谷

混ぜ返していいですか。連携するために「メリット」を掲げる必要はないのではないのでしょうか。要は、種があればいいのではないか。「うちのグループはこれができるよ」「私たちはこれをやっているよ」ということが、まだまだどこも明確にできていないけれども、ちゃんと発信できればいいのではないかと思います。

必要な人たちがくっつくのが連携であって、むやみに要らない人と連携をする必要はないわけです。プロジェクトを作ると言ったときに、必要なものが補完され合って連携になるわけですから、もちろん会議をやったり、楽しく集まりましょうというのはいいのですが、そこで示すものは「連携をしよう」というお題目ではなくて、互いに持っている「種」をちゃんと見せあえば、自然に必要なネットワークができていくのではないかという気がします。

山本

無駄なネットワークの呼び掛けが多すぎると。

岡野谷

多すぎるのではないのでしょうか。JCNがネットワークとしてうまくいっているのは、みんながこういうふうに、ただ手を挙げて発信しているだけで、何かをしなさいと言われないからだと思います。面白そうなら乗るし、興味なければ無視する。それでもJCNの大きな連携はできているのではないのでしょうか。

稲垣

平時の話だと思いますが、「防災」と言うから、それで排除しているようなところがあるのではないかと思います。

山本

ネットワークを組む、連携を呼び掛ける時の、テーマ設定の問題ですよ。

丸谷

組織と組織の関係だけで多様にといいことだけでなく、人と人とのつながりがキーワードだと思っており、それも単なる人と人との関係というより、頼まれたら断れないという関係が大事ではないかと思います。このメンバーは頼まれたら断れない人ばかりだという気がするのですが、ほかのところもある程度大事でやるのだけれども、これは断れないなという頼み事ができる関係をどうやって結ぶのかということだと思います。

東日本大震災後2年間続いている中で、この関係がかなり構築され、ああいう組織があった、と新しい組織の人にもどんどん頼む関係ができていると思うのですが、もうしばらくするとその関係がなくなってくるのではないかと私は心配になりかけています。要するに、このような関係は右肩上がりに増えていくのではなく、大きなイベントがあって盛り上がったら維持しないと、下がってしまう心配がある。

このようなことが多様な展開をするときのつながり方ではないかという気がします。

人と人とのつながりでも、頼み事ができるぐらいまで密接に持っていかなければいけない。逆に、頼まれないでとにかく参加してくれというぐらいだと駄目なのではないかという気がしているので、そういう観点からも考えてみたいと思っています。

鍵屋

何のために何をやるかというプロジェクトが大事だということはみんな一致しています。そのプロジェクトをうまくやるための仕組みづくり、ここに連携が必要であればやればいいし、1人でやれるのであればそれでもいいけれども、プロジェクトは、いろいろなところに同じようなことがあって、拡大・改良していかなくてはならない。それをいろいろな発想で新しく作っていくところに面白さがある。最初のアイデアがどんどん膨らんでその場その場で変わっていくというのは、すごくリアル感があるというか、一番面白いところだという気がしました。そのためにはいろいろな人が組まないといけない、1人の組織だと限界があると

いう気がしました。

山本

解決策も一つのアイデアも出てきました。大体皆さん、言ってもらいましたか。

高梨

小村さんから図上演習の話が出たのですが、かなり前の段階で、中越地震の後、広域連携は重要だということで提案して、本格的に取り組もうとしたのですが、予算が付かなかったのです。結局、小野田さんの方で企業から取ってもらって基金を作って、静岡で展開できるようになったのです。原資がないと呼んでやることもできないということからいくと、今はすごくハード対策中心になってしまっていますが、ソフト対策の方をもう少しやってくださいと。プロジェクト制か何かで課題を作って、検討するようなところを設けてもらおうと、その中で検討できるのではないかというのが一つです。

それが一つは巨大災害に向けてのということで、毎回静岡でやっているのですが、「栗田さん自身はどのような」「弘中さんのところはどのような」みたいな話が本当はあって、山本さんも当然なのですが、そこへの受援も絡むようなものを考えなければいけない。それからいくと、静岡ばかりではなく、小村先生の言うように横展開しなければいけない時期に来ているのではないかというのが一つです。

そのときには、草の根、それぞれの種があるところが基本で、そこがネットワークできるのですよということができていればいいのだと。そこを元にして何かのテーマでやれるようになるといいし、さらには、日常性がきちんとできていないと災害のときにも生かせません。これは専門性の話でもあるし、災害が起きてみて普段の生活が大事だったと分かったけれども、それは基本的には日常性のことなので、ここをまずやっていくにはどうしたらいいか。これが防災につながっていくということです。

無理に防災ということでやらなくても、むしろこちらの方を重点的にやってもらえばいいのかもしれない。ただ、広域連携というところで、巨大災害に向けてという次のテーマに向けての課題が一つあるのではないかと思います。

山口

小村先生がおっしゃった「出会いの場がない」と基本的に同じなのですが、「マルチセクターで集まる場がない」。なぜこう書いたかということ、私は、前政権のときにあった「社会的責任に関する円卓会議」の地球規模課題ワーキンググループに入っています。そこには企業、労働組合、生協、NPO、NGO、政府も通産省と他に幾つかの省庁が入っていてマルチセクターの枠組みで議論が行われています。今回も、ある程度は入っているのですが、例えば労働組合とか内閣府以外の省庁とか、必要なあらゆるセクターが入るような議論の枠組みがあった方がいいのではないかと思います。

山崎（東京ボランティア・市民活動センター長）

今おっしゃったことで、セクター間の連携をするというのは災害の場合には絶対ベースラインだと思うのですが、目的を一つにするということの連携だとすると、そこには一つのお作法があるというか。日赤だとか、先ほどおっしゃったような国際基準だとかを前提に置いて連携していくという考え方を一方できちんとして、基本の災害支援の方法について社会的な責任を果たしていかなければいけない。そこは一つあると思います。

でも、今日の議論で出てきたのは、地縁型の組織のもっと前に、もう少しグラスルーツの活動がありますよね。例えば、要援護者という言葉でくくっているところに問題があって、内閣府の「災害時要援護者の避難対策に関する検討会」が出す報告書では「避難行動要支援者」という言葉を使っていると思うのですが、高齢者一人で住んでいる人と老老介護でおられる人と自閉的な行動など発達障害がある人と認知症の人がいるところでは違うわけです。そういうことをグラスルーツできちんと見ながら支援のプログラムを作っていくという目標がないといけません。自己完結、自己満足してもいいのですが、私たちの目標はどこにあるかを考えると、もう一つのベースラインを作っていかなければいけないのだと思うのです。その作り方のプログラムが非常に弱い。

発見とか気付きとかリーチアウトの手法を持っている支援団体は割と早く入れるし、方法があるし、プログラムが作れる。けれども、そこが弱いために、ただ一方通行で活動しているという形の支援をいくら繰り返しても下手な鉄砲を撃っているだけです。その辺の議論をもう少し深めていかないと本当の意味での協働にならないと思います。

連携をやっているうちに、今度は協働に変わるはずなのです。協働とは、目的に従って、それぞれの支援の活動が変容していくプロセスです。そこに行くまでの足取りを確かなものにしないと連携には至らないし、協働にはもちろん至らない。その辺のことを高梨先生がおっしゃったのかなと思って、これは今日のすごく大きな収穫だと思っています。

小村

最後の最後に言うには大きなテーマすぎるのですが。連携の議論は分かりましたが、ここの仲間は、連携だけではなくて、防災ボランティアという形でやっています。災害時支援のボランティアだけではないはずなのです。そうすると、予防の議論、細かいところでは家具の転倒防止あたりから始まって都市計画という話にもなっていくのですが、そういうところへの配慮が落ちていませんかということだけを言っておきたくてあえて書きました。

山本

今日のテーマは連携なので、そこは今日の議論では話しきれない提起だと思うのですが、ありがとうございます。

どうまとめたらいいか、途方に暮れているのですが、まとめをする前に、私なりに気になったところを一点だけ言いたいと思います。連携とか、さらに先に行って協働をできるだけ習熟した団体と、今回初めて

立ち上がって自分たちの思いを持って動き始めた団体が、同じテーブルではディスカッションできないですよ。

フレッシュな団体が自己完結して連携できないことは駄目なのかというと、僕は駄目ではないと思っています。自分たちの思いから動き始める団体をどんどん増やしていきたいですよ。その先に連携できる団体ができてきて、さらに習熟して協働もできる団体になっていく。最初から全部それができる団体ではないし、僕たちも最初はできなかったという部分を忘れて、習熟した団体同士の連携だけを議論している気がしてすごく気になりました。

では、どうまとめたらいいかなのですが、まず連携の心や価値をどうやって認めているのかという部分では、違いを理解していくとか、目的をきちんと持って連携していけばやっていける。自分たちにできないことを連携によって実現していくのだというところは、やはり大きな価値です。自己完結して終わってしまう団体では本当のニーズが解決できていない可能性があって、それを解決するために絶対に必要なのだという前提がある上で、でもできない課題は何なのかというところで、皆さんからいろいろな意見が出てきています。

連携することのメリットは何かということ、参加を呼び掛ける人たちに分かりやすく伝えられていないのではないか。みんながここの部分を共有できていないのではないか。それが大きいです。それから、それぞれの団体にまだまだ余裕がない。非常にかつかつの中でやっているからこそ、やりたくてもできない側面もあるのは間違いないです。面白いところでは、それぞれが自分たちの筋を大事にしすぎて、よそとの壁を作っているかもしれないという意見もありました。

それから、出会いの場で、マルチセクターで集まる場がない、出会いの場が少ない。これは、メリットをうまく提示できるコーディネーターがないから場を設定できないというところでつながっていくのかなと思います。「こういうことがあるから集まりましょう」と胸を張って言えない。「連携してやれば、きっと何か出てくるはずだから」ぐらいでしか呼び掛けができていない。だからこそ、熱心に呼び掛けられないし、参加する側もそこまで余裕がないところで共通の良さを持ってこられないのではないか。

そういう共通の良さを持つていくためには、連携をするときの目的をしっかりと持って、自分たちで仕組みを作っていく。そういうプロセスをみんなでやれば面白みも出てきて連携ができるかもしれない。そのためのソフトにも予算を付けましょうという議論もありました。

そういう流れを紹介するぐらいになってしまいますが、よろしいでしょうか（拍手）。こちらが話せていませんが、具体的な提案がいろいろ入っていたので、そちらはまた議事録に載せていただくような感じになるうかと思えます。抜けているところはないですか。

阿部

今日は、平時からのということが一つ大きな時間設定でしょう。災害が発生すれば余裕など本当になくなってしまふのだから、平時からこれをやる重要性をみんなが自覚しておかなければいけないということになりますね。

山本

平時と災害時がつながっていくというところでの大事さ、これは入れます。

小村

無駄なネットワークが多すぎる、むやみに要らない人とくつつく必要はないという、ある意味で引いた、岡野谷さんのおっしゃった話も。ある意味で、そこまで開き直る必要もあるのではないかと思います。

鍵屋

ただ、あまり目的とか効率性とかガチッといくのは企業的発想が強すぎるのかなという感じもあります。ボランティアには、そういうことに縛られなくてもいいという良さもあるので、固いプロジェクトとか固い数字で見せるのではなく、量とか質ではなくて、ハートマークの付いた支援、ハートマークをたくさん作っていくというのがいいのではないかと思います。

山本

結び付くのは、メリットのこともあるけれども、多様な視点の気付きの場でもあるわけですね。多分そういうことに気付いていないから参加できていないので、認め合うとか、いろいろな人の考え方を知る場ですという見せ方も大事かもしれません。

阿部

そういった意味では、「防災」を付ける必然性があまりなくなる場合もあるよね。

山本

加えて、南部さんや岡野谷さんが言っていて、丸谷さんがまとめてくれた、頼まれる人間関係、組織の関係と人の関係というところはいろいろな人から出ていたので、付け足そうかと思いました。では、15分から全体会で再開ということですので、皆さんフォローしてください。